

身代わりの男装令嬢は

悪辣^{あくらつ}王子の蜜檻に囚われる

目次

身代わりの男装令嬢は悪辣^{あくらつ}王子の蜜檻に囚われる

5

番外編 それぞれの想い

238

番外編 雪の季節は平和……？

273

身代わりの男装令嬢は

悪辣^{あくらつ}王子の蜜檻に囚われる

プロローグ

「なっ、なんだこの手紙は!!」

父の裏返った声を聞き、ナディアは慌てて階段を下りた。

「お父様!? どうされたのですか?」

リビングへ顔を出すと、父が手紙を広げ、わなわなと肩を震わせていた。その手に握られた手紙がカサカサと音を立てている。

父に手紙を渡したのは、すぐそばで困惑している様子の使用人だろう。彼は結婚準備のために戻ってきていた兄——ノーマンの世話係もしている。

使用人から受け取った手紙の内容に驚いたことはわかるが、それにしても父の狼狽^{ろうばい}ぶりは今まで見たことがないほどだ。

ナディアがさらに近づくと、父の顔は青ざめており、怒りの中に焦^{あせ}りや困惑が混じっていることが見てとれた。

「お父様……?」

こんなに取り乱す父は珍しい。普段はとても温厚で、声を荒らげることなどほとんどないという

のに……

ナディアは状況が呑み込めず、使用人に視線を移す。だが、彼は眉を下げておろおろするばかりで、何かを説明してくれる様子はない。

そもそも何を言ったらいいのかわからないようだ。

ナディアが再び父のほうへ顔を向けると、彼は使用人と視線を合わせ、静かに口を開いた。

「それで、ノーマンは今どこに?」

努めて冷静に話そうとはしているが、父の手の中で皺^{しわ}くちやになった手紙が彼の感情を如実^{じょじつ}に表している。

「それが、その……」

「お兄様に何かあったのですか?」

言いよどむ使用人にナディアが問うと、彼は観念したように目を瞑^{つむ}った。

「今朝、ノーマン様のお部屋に伺ったらお姿がなく……この手紙が机に……つまり……その……ノーマン様が屋敷におられないのです……!」

「え……?」

ナディアは突然のことに目を見開く。

ノーマン・モフロワ——十六歳でロトカスター王国騎士団へ入団した優秀な騎士であり、ナディアの双子の兄だ。

ややお調子者な面はあるが、明るい性格で老若男女から人気がある。

幼い頃から剣の実力がずば抜けていて、頭も切れるタイプ。難関といわれるロトカスター王国騎士団の試験にも最年少で主席合格した。

そして、モフロワ男爵家の自慢の跡継ぎ——だった。

「ちょっと待ってください。お兄様がいないって、いったいどういうことですか？」

「昨夜、お休みになられるときには確かにいらつしやったんです。それなのに、今朝は何度お声がけしても返事がなく……それで、お部屋に入ったら置き手紙があり、アニー王女とは結婚できないと……」

「結婚できない……？ 縁談の話が出たときは、一言もそんなことは……」

兄ノーマンとロトカスター王国の第一王女アニーの結婚が決まったのは、つい一ヶ月前のことだ。王家からの直々の申し出は田舎の男爵家が断れるものではない。だが、ノーマン本人とて縁談が舞い込んできたときには嫌な顔ひとつしなかった。

「ふうん、そうきたか」と、妙に納得したような返事をし、後ろ向きな感情など見せなかったのだ。だから、特に異論はなく、いわゆる王女との政略結婚を受け入れたものだと思っていた。

それに、もし不満があったのなら、兄の性格上何も言わないことは考えにくい。ましてや、黙って逃げ出すような人ではないはずなのに……

「手紙には、自分には恋人がいるので王女とは結婚できないと書いてあります……」

「ええっ？」

しかも、恋人がいるなんて寝耳に水である。

もちろん、父もナディアと同じだっただろう。

「つまり……駆け落ちをした、ということだな？」

今まで聞いたことのない父の低い声に、ナディアの肩がビクリと跳ねる。

「二人だろうが一人だろうが、いなくなったというのなら同じことだろう」

父が怒りに身体を震わせ……そして、天井を見上げると同時に握っていた手紙を真っ二つに破いた。

「ノオオオオオマンンン!!」

モフロワ男爵邸に響いた父の悲痛な叫び声は、本人には届かない。

——使用人に仕事に戻るよう促した^{うなが}後、ナディアは床に落ちた手紙を回収した。

その文面を読むだけで、兄の明るい声が聞こえてくるような気がする。

「俺はアニー王女とは結婚できないよ！ ってことで、俺は恋人と一緒に旅に出る。そのうち戻るかから捜さないでね☆」

第一章 あなたとは結婚できません

「い、今、なんとおつしやいましたか？」

ナディアは驚いてひっくり返った声を出し、向かいのソファに座る神妙な面持ちの両親を見た。

この数日ですっかりやつれた父は、片手で目を覆う。

それもそのはず。

男爵家で雇っている騎士たちに息子を検索させているがいい知らせはなく、王女がモフロワ男爵領へ到着するまでもう時間がない。

「ノーマンが見つからないのだ。かくなる上は、ノーマンを見つけ出すまで、お前が兄のふりをするしかない」

「お父様、お気を確かにお持ちください。いくら双子だと言っても、性別が違うのですよ。すぐにバレてしまうに決まっています」

自分がいかにおかしな提案をしているかは理解しているのだろう。

父はナディアの指摘にグツと言葉を詰まらせたが、隣の母が諦めたように首を振る。

「ナディア。王女殿下はすでにモフロワ男爵領へ向かっているわ。今さら婿が行方不明だから王都

へ帰れなんて言えないでしょう」

「そうだ。王女殿下の評判に傷をつけるような真似はできない。こんな田舎の男爵家から追い帰されたなんて……それも、縁談の話が進んだ後に婿が駆け落ちしたなどと、どう申し開きをするというのだ？」

両親の言うことはもつともだ。

しかし、嘘は重ねれば重ねるほど事態が複雑になる。それが結婚の話——しかも王家との婚姻となればなおさらだ。

「ですが……」

「ナディア、少しの間だけ時間を稼いでくれればいい。一番はノーマンを見つけて連れ戻すことだが、それが叶わなくとも、王女殿下からの婚約破棄という形をとるべきだ」

ナディアが兄のふりをしてアニー王女を迎え入れることで、王女の矜持はもちろん、モフロワ男爵家の体裁も取り繕える。

田舎とはいえ、人の口に戸は立てられない。ノーマンが行方不明であると知られば、噂はあっという間に広まるだろう。

「王女殿下の顔に泥を塗るような真似はできない。あくまでも悪いのはノーマン——否、モフロワ男爵家でなければならぬのだ」

「そうよ。ただでさえ、モフロワ男爵家のような田舎者に嫁がされる王女だと噂されて、申し訳ないというのに」

アニー王女は側妃の子だ。

女であるため、王位継承権争いには無縁だったようだが、母が男爵家出身であるが故に、貴族たちからは軽く見られているらしい。

先日、第一王子が事故で亡くなり、第二王子が王位を継ぐことが決まったことで、城に王女の居場所はなくなったのだろう。

第二王子の母親も側妃ではあるが、彼女は公爵家出身で、同じ側妃という立場に自分より低い身分の者がいるのが許せず、王女の母親を目の敵にしているという。

「いいか、ナディア。王女殿下にとって、この田舎へ嫁ぐことは悪いことではないと思う。王都で肩身の狭い思いをし続け、さらに政略結婚の駒として利用されるより、王都から離れたこの場所ですてきな暮らしをするほうがいい」

「それができなくなったなら、せめて王女殿下がこの状況の中でも一番いい形で王都へ帰れるようにしなければならぬわ。他の嫁ぎ先に目星がつくまで、うちでお過ごしいただくことも考えているの」

両親は息子が引き起こしたこの婚約破棄騒動を、王女に不利にならない形で納めるべく動くつもりだよ。

それは当然の責任であるし、父が言うように、王女の今までの境遇に同情している部分もあるのだろう。

「もし、アニー王女がこのまま王都へ戻ったら……どうなるのですか？」

ナディアの問いに、父はふうつとため息をつく。

「おそらく……カーティス殿下の選んだ家門に嫁ぐことになる」

カーティス——第二王子が王位を継げば、王女はやつかい払いされる。彼らから押しつけられるだろう縁談は、十八歳の娘にとって酷なものだろう。

第二王子と懇意にしている貴族は、すなわち王女と彼女の母親にとって敵だと言っても過言ではない。

第二王子に都合のいい結婚をさせられるのは明白だし、嫁ぎ先でどんな仕打ちを受けるかもわからない。

それならば、田舎であろうが、政治的なしがらみの薄い家門に嫁ぐほうがいいに決まっている。

男爵家というのも彼女の母方と同じであり、中央政治に介入できるほどの力はない。カーティス第二王子——正確には、彼の母親を説得するのは難しくなかったはずだ。

一方で、ノーマンは優秀な騎士として有名だ。

もしかしたら王女とも接点があったのかもしれないし、王女が兄との結婚を希望しても不自然ではない。

兄を気に入ったのか、はたまた彼で妥協したのかは定かではないが、とにかく王女のお眼鏡にかなった。

それなのに……

「お兄様はすべてをわかっていてこんなことを……？」

「王国騎士団に所属しているノーマンが、王宮の事情に疎いはずがないだろう」
父がまた深いため息をつく。

相手の事情をすべてをわかった上で受け入れた縁談のはずなのに、なぜ今さら逃げ出したのだろうか。

兄は約束を反故にするような人ではない。

王女を好いていないとしても、政略結婚だとしても、一度受け入れた以上、こんなふうに周囲を困らせる行動をとるのは不可解だ。

ナディアの頭の中では、兄の大胆な行動に対する困惑と違和感、そして「なぜ？」という疑問が渦巻く。

それは両親も同じなのだろう。

しばらく誰も何も言わないまま時が過ぎた。

「……わかりました。とにかく、今はアニー王女をお兄様として迎え入れればいいのですね？」
ノーマンが見つからないことには、彼の真意はわからない。

こうして悩んでいる間にも王女はモフロワ男爵領へ近づいている。

今、ナディアがすべきことはノーマンとして王女を迎え入れること。

「ナディア……！」

父の表情にわずかに安堵が混じる。

娘へ負担をかけることを申し訳なく思いつつも王女を門前払いするわけにもいかず、彼にも正解

がわからないのだろう。

親としての気持ちと臣下としての気持ちに板挟み状態なのだ。

「お父様のおっしゃる通り、ひとまずアニー王女をお迎えすることが最重要なのは間違いないでしょう。その後は……正直にお話するしかありません」

「ありがとう、ナディア。こんなことを頼むなんて……本当にすまない」

「謝らないでください。今はお兄様を見つけることと、アニー王女を無事にお迎えすることを考えましょう」

そして、なぜかナディアには確信がある。

（お兄様は……帰ってくるわ）

手紙にも戻ると書いてあった。

もしかしたら、両親も兄のその言葉を信じているのかもしれない。そうでなければ、時間を稼ごうなどとは言い出さないだろうから――

二日後。

ナディアは緊張しながら門前に立った。

自分が兄のノーマンとそっくりに見えることは何度も何度も鏡で確認したが、これから嘘をつく

ことがナディアの脈を速くする。

金色の長い髪を高い位置でひとつにまとめ、ノーマンのクローゼットから服を拝借し、身長は靴に少し細工を施して誤魔化した。

二人とも瞳の色は母譲りの緑色だし、顔立ちもよく見なければさほど違いはない。

王女とノーマンが相思相愛で逢瀬を重ねていたならばまだしも、兄の行動を考えるとそこまで近い間柄だったわけではなさそうだ。

すぐにバレることはないだろう。

兄が髪を伸ばしていたことは幸いだった。そうでなければ、ナディアは髪を切らなければならなかったから。

家族の経歴はもちろんすべて頭に入っているし、兄と一緒に剣の稽古をしていたから、最初の当たり障りのない会話であれば乗り切れる。

あとはタイミングを見て話を切り出すだけだ。

彼女が謝罪を受け入れてくれるかが問題だけれど……

(お兄様はいつたどこへ行つてしまったの……)

最終的には正直に事情を話すとしても、兄に扮してアニー王女を出迎えることは王族を欺く行為だ。

一度婚約を承諾して逃げ出すなんてもつてのほか。

こんなにも畏れ多いことを、簡単に実行してしまう兄が恨めしい。

ドクン、ドクン。

嫌な音を立てる心臓。

そのリズムに合わせるかのように、遠くからカタカタと馬車の走る音が近づいてくる。

ナディアは唾を飲み込んで、音がするほうへ顔を向けた。

遠くからでもわかる立派な箱。

田舎道には似合わない大きく豪華な馬車だが、ナディアが想像していたほど煌びやかな印象ではない。

(それに……馬車が一台……?)

王女ともなれば、輿入れの荷物は多いものではないのだろうか。ドレスやアクセサリなどの荷もそうだが、使用人を連れてくるものだと思っていた。

護衛騎士の数も明らかに少ない。

(王都で肩身の狭い思いをしていたって……)

先日の父の言葉がよぎる。

だが、いくらなんでもこれでは王女としての威厳すら――

ナディアの心がざわめく中、馬車は彼女の前で停まった。

「アニー王女殿下のご到着です」

護衛騎士の一人が気だるげにナディアを一瞥する。

その視線からは、彼が自分を「田舎者」として蔑んでいるのだということがよくわかった。

ナディアは拳を握り締めることで波立つ心を鎮め、ゆつくりと馬車の前へ出た。御者が扉を開き、すぐにふわりと濃い青色のスカートが風に揺らめく。

(わ……)

王女は長袖のドレスを着ていた。首元にもフリルがあしらわれ、肌の露出は少なく、スカートもボリユームは控えめだ。

灰色の長い髪は下ろしており、一つとして髪飾りをつけていないのに、太陽に照らされるほかに輝く様がとても綺麗だ。

馬車の装飾といい、王女はあまり飾り立てるのが好きではないのかもしれない。

白く透き通るような肌は、王城からほとんど出たことのない証のように思えた。

それでいて、弱々しさはなく、深い海のような青色の瞳には強い意志が垣間見える。

鋭く、美しく……

「——っ」

アニー王女と視線が合った瞬間、ナディアの身体が硬直する。

自分を見下ろす彼女に、恐怖すら感じる。

これは……王族の威厳？

「ノーマン」

「あ……はい。ようこそ、モフロワ男爵領へ。アニー王女殿下」

父に促されてナディアはハッと我に返り、王女の前へ出て手を差し伸べる。

その瞬間、彼女がわずかに目を細めたように見えた。

ナディアの挨拶が遅れたことで怪しまれたのだろうか。それとも、エスコートが不自然だったのだろうか……

内心ドギマギしながら、ナディアは王女に笑顔を向ける。

アニーは一言も発しないままだったが、ナディアの手に自分のそれを重ねてゆつくり馬車から降りた。

「わざわざお出迎えいただき、ありがとうございます。ロトカスター王国の第一王女、アニーと申します。これからどうぞよろしくお願いいたします」

王女は洗練された所作で両親に挨拶をし、ナディアに向き直る。

「ノーマン殿も……これからよろしくお願いいたしますわ」

初めて聞いた王女の声は柔らかいけれど、どこかよそよそしい。

自らの希望は二の次で、対外的な条件のみを鑑みて嫁いできたのだから、仕方のないことなのかもしれないが……

その他人行儀で周囲と距離をとる礼儀正しさは、ナディアの胸に突き刺さった。

「こちらこそ、よろしく願います。どうぞ、ご案内いたします」

「ええ、ありがとう」

アニーはナディアが差し出した手を取り、再び歩き出した。

彼女はまっすぐ前を見据えてよどみなく歩を進めていくので、ナディアはついて行くのに必死で

足を動かす。

ナディアの厚底靴は普段履き慣れた靴よりも重くて歩きにくいのだ。

ドレスを着てヒールを履いている王女はゆっくり歩くかと思えば、どちらかというと歩幅が大きい。

（背が高い分、足も長いのかしら……）

アニーの背丈は厚底靴を履いているナディアと同じくらい。女性としてはかなり身長が高いと言える。

今はノーマンとして歩いているので、ナディアもできるだけ大きな一歩を踏むようにとアニーの歩く速さに合わせて足を動かす。

そのせいで、応接室へ着く頃にはふくらはぎが攣りそうになっていた。

「どうぞお掛けください」

「ありがとうございます」

ナディアがすすめた椅子にアニーが座る。

王女の後ろには護衛騎士が立ち、ナディアは少し驚いて彼を見た。

王女が馬車を降りたとき、使用人らしき者はいなかったから気づかなかったが、彼は王女の馬車の護衛をしていた騎士のうちの一人だ。

年は三十代半ばから四十代くらいに見える。

騎士の男は、ナディアの視線に気づくと軽く頭を下げた。

「ノーマン殿……いえ、ノーマン様。このたび、王女殿下の付き人として参りました。改めてよろしくお願ひいたします」

王都からやってきた王女付きの騎士——つまり、ノーマンと同じロトカスター王国騎士団の一員ということだ。

ノーマンとは少なくとも顔見知りの関係であることに間違いはないが、ナディアには名前がわからない。

「ああ……そうだったのか。よろしく」

一つ、また一つと嘘をつくたび、誤魔化すたびに喉に何かが詰まるようで息苦しい。

使用人が茶を運んでくるわずかな時間でさえ、とても長く感じられる。

早く真実を打ち明けてしまいたい——もしそれで罰を受けるとしても、この偽りの時間よりはマシな気がした。

「どうぞ、召し上がってください」

茶と菓子テーブルに並んだところで、母が王女にすすめる。

「ありがとうございます」

アニーは微笑みただけで、口をつけようとはしない。

ナディアが両親に視線を向けると、彼らも心配そうにアニーを見ていた。

このまま話を切り出すのも気が引けると思っている様子だ。

それもそうだ。

何日もかけてモフロワ男爵家までやってきた王女に対し、「貴女^{あなた}の婚約者は駆け落ちしました」と告げるのは、「すぐに帰ってほしい」と言うのと同義である。

嘘をついていることは心苦しいが、迎え入れたばかりの王女を追い返すような発言は、誰にもできなそうだ。

もちろんすぐに王女を追い返すつもりは毛頭ないけれど……

ナディアは静かに深呼吸をして、口を開いた。

「アニー王女殿下……長旅でお疲れでしょう。もしよろしければ、先にお部屋へご案内いたしますので、夕食までお休みになられてはいかがでしょう」

「ああ……そうだな。気がつかず申し訳ない」

父がナディアに同調し、すぐにアニーが微笑^{ほほえ}む。

「お気遣いありがとうございます。到着早々で申し訳ないけれど、そうさせていただきますと助かるわ」

「では、参りましょう」

ナディアは再びアニーをエスコートして応接室を出た。

「王女殿下と……私の住まいは、離れの別邸を整えました。この本邸よりは小さいですが、気兼ねなくお過ごしいただけると思います」

モフロワ男爵家はそれなりに広い土地を有している。

本邸と離れが同じ敷地内にあり、以前、離れは引退した前当主が使っていた。

兄と王女の婚約が決まり、急遽^{きうそ}二人の新居として整えたものだ。

「あの……使用人は……」

「心配は無用よ。知つての通り、私の母親は他の側妃より身分が低く、王宮での扱いはいいものはなかった。おのずと私の扱いもね」

「でしたら、モフロワ男爵家の使用人を——」

「心配は無用と言ったでしょう。王女と言っても名ばかりの立場だったから、ある程度のことはい人でもできる」

アニーがナディアを遮^{さへぎ}るように言う。

モフロワ男爵家の使用人を使うつもりもないらしい。

「何かあれば、騎士がやる」

「ですが……」

護衛騎士は男性だ。王女の手伝いにも制限があるだろう。

もちろん、アニー自身が自分でできると言うのだから、着替えや湯浴みは問題ないのかもしれないが……

ナディアが騎士をチラリとうかがうと、彼と目が合った。

なんだか観察されていたような気がして、背に嫌な汗が伝う。まるで自分がおかしなこと言ってしまったかのような気分だ。

王女の身の回りの世話の心配をすることは当然のことのはずなのに、ナディアが間違っていると

でも言わんばかりの……

「……わかりました」

違和感の正体はわからないけれど、これ以上何かを喋るのはいくさそう。ナディアがそう結論づけて引くと、それから二人の間に会話はなくなってしまった。

ナディアは余計なことを言わないようにと口が重くなり、アニーに至っては特に喋る必要性を感じていなそう。

黙っているからか、疲れているからか、アニーの雰囲気はどこかひりついているように感じられる。

離れに着いて、部屋に案内したときも表情がほとんど変わらない。

「夕食のときに……お迎えに上がります。必要なものがあれば、騎士をよこしてください。使用人については……落ち着いてから、またご相談しましょう」

無理強いはいないが、離れで暮らすのならば使用人は必要だ。

「お気遣いなく」

ナディアはできるだけ慎重に提案したつもりだったが、アニーはそっけなく言って部屋に入ってしまった。

閉まった扉の前ではあつと大きなため息が出てしまう。

王女が望んでここに来たわけではないのは明らかだ。

王宮での待遇もよくなかったようだし、嫌々受け入れた田舎の男爵家の息子との結婚は婚約者が

失踪するという屈辱的な展開……

いったいどんな顔で打ち明ければいいのだ。

真実を告白するタイミングは、すでに逃がした気がする。

アニーの態度を考えると、これからその機会は訪れないように思えて、ナディアは重い足取りで来た道に戻るのだった。

数時間後。

ナディアは再びアニー王女の部屋の前に立っていた。

夕食は要らないという王女のために軽食を持ってきたのだが……

扉の前に立っている騎士がナディアに気づき、軽く頭を下げる。

「アニー王女にお食事をお持ちしました」

「ありがとうございます。しかし、殿下は——」

騎士の言葉の途中で扉が開き、ナディアの視線がアニー王女と合う。

アニーは湯浴みを終えたばかりなのか、バスローブ姿で無防備だ。

灰色の髪は濡れて、前髪から滴が落ちる。化粧を落としたせいか、太陽と照明の違いか、先ほどと雰囲気が違う。

元々そんなに友好的な印象はなかったが、今はもつと鋭利で冷たい印象だ。

「あ……申し訳ありません！ お食事をお持ちしたのですが、タイミングが悪かったようです」
慌てるナディアとは対照的に、アニーは妙に落ち着いていて、小さくため息をついた。

「……入って」

なんの躊躇もなくアニーが扉を大きく開くので、騎士のほうが狼狽した様子で「殿下」とアニーに近づこうとする。

婚約者とはいえ、バスローブ姿で異性を部屋に通すことを心配しているに違いない。

「バルディ。通して構わない」

アニーの声は少し掠れて低い。

疲労のせいだろうか。

王女に制された騎士は、出したけた足を引き、元の位置に戻る。

「それと……何があっても、中に入らなくていい」

「……承知いたしました」

彼は王女の命だから従うしかないのだろうが、ナディアだって王女の風呂上がりに押しかけるつもりはなかった。

それに、アニーの様子に荒っぽさが感じられ、近寄りがたい。

「アニー王女、私は出直して——」

「いいから」

「っ、わ、かりました」

やや強めの口調で促されて、ナディアは一度天を仰いだが、仕方なくアニーが開けてくれた扉から部屋の中へ入った。

食事だけ置いてすぐに戻ればいいだろう。

疲れている彼女の邪魔をしたくはない。

機嫌がよくなさそうだし、長居は無用だ。

ナディアは足早にテーブルへ向かい、持っていたトレイを置いた。

「簡単なものしか持つてこれませんでした、何も食べないよりはいいでしょう。私はこれで失礼しますから、ゆっくり召し上がってください」

ところが——

すぐに踵を返したナディアの視線の先で、アニーが扉を閉めてしまう。

「あの……？」

「どこへ？」

「私は、戻りますが……」

「戻る？ その前に、話があるのでは？」

アニーが目を細める。

「——っ」

その視線の鋭さに、思わず目が泳いでしまった。

これでは後ろめたいことがあると言ったようなものだ。
ナディアの心臓が嫌な音を立てる。

「あ、の……」

喉がカラカラに渴いて、うまく声が出てこない。

鼓動が速くなり、汗が滲んだ。

咄嗟に言い繕えなかった時点で、ナディアが何かを隠していることは明らかだろう。

それ以前に、アニーはナディアに「話がある」ことに気づいている。

(なんで……いつから? どこまで……?)

いや、そんなことを考えても無意味だ。

そもそもアニーが来たら正直に話そうと思っていたではないか。

ノーマンが逃げたことも、ナディアがノーマンのふりをして王女を騙したことも、すべて紛れもない事実だ。

それを正直に話し、罰を甘んじて受けようと家族の皆が覚悟している。

ただ、もう少し落ち着いてから両親もそろった状態で王女に話をするつもりだっただけで、今話しても、後で話しても結果は同じだろう。

それなら——アニーがすべてに気づいているというのなら——むしろ今話してしまったほうがいいに決まっている。

ナディアはアニーの厳しい視線を真正面から受け止めるため、顔を上げた。

アニーは少し意外そうに片眉を上げたけれど、表情は険しいままだ。

ナディアは大きく深呼吸をして、深く頭を下げた。

声を低くすることも、ノーマンの口調を真似ることもしない。

これは「ナディア」としての言葉。

「申し訳ございません。私は……貴女とは……アニー王女殿下とは結婚できません」

アニーは何も言わず、ナディアも頭を下げたままでは彼女の表情がわからない。

「私は……ノーマンではありません。双子の妹のナディアと申します。兄は……今、行方知れずで……私が代わりに殿下をお迎えしました。言い訳にしかありませんが、こんな田舎貴族に王女殿下が追い帰されたなどと噂になったらご迷惑になると思って……」

「私から婚約破棄をしろ、と? それですべてが収まると思うのか?」

ひどく怒っているのだろうか。

アニーの声が急に低くなった。

口調も荒っぽく聞こえる。

それも当然だ。

嫌々やってきた田舎の領地で、婚約者の男は自分から逃げ、双子の妹が婚約者になりすまして自分を騙したのだから。

「申し訳ございません。すべて、兄と、兄を止められなかった私たち家族の責任です。どんな罰でも受けます」

謝って済む問題ではないのは重々承知しているものの、今は謝ることしかできない。
ナディアはぎゅっと目を瞑^{つむ}って頭を下げる。

どんなふうに罵^{ののし}られても仕方のないこと――

「ふ……ははっ」

だが、予想に反し、部屋には笑い声が響いた。

ナディアは驚いて顔を上げる。

「アニー、殿下？」

アニーは口を大きく開けて笑い続けていて、その姿は上品で淑^{しと}やかな王女のイメージとはかけ離れていた。

呆然^{ぼうぜん}とするナディアの前でひとしきり笑った後、彼女はあつと呼吸を整える。

「母上の短絡的な計画がこんなにうまくいくとは、な」

独り言のように小さく呟^{つぶや}かれた言葉の意味は、ナディアにはよくわからない。

計画とはいったいどういうことなのだろうか。

最初からこの事態を想定していた？

いや、そんなはずはない。

ノーマンがこんな突拍子もない行動をするなど、家族ですら予想していなかったのだ。

それなのに、彼が失^し踪^{そう}することから双子の妹が兄のふりをする事まで、全部予測できるわけがない。

もし仮にそれが可能だとしても、すべてをわかつていながら、そんなリスクの高い縁談を進めるのは変だ。

「ナディア」

「っ、はい」

初めて本当の名で呼ばれ、ナディアは背筋を伸ばした。

どのような罵^{ののし}りを受けようと、罰を言い渡されようと、ナディアはすべてを受け入れるしかない。

「俺も一つ、言っておくことがある」

「はい……え？」

覚悟を決めていたナディアは、予想だになかった言葉に目を丸くする。

言っておくこと？

アニーが、ナディアに？

いや……それよりも今、アニーは何と言った？

誰が――

「俺……？」

「俺は男だ」

浮かんだ疑問と、アニーの爆弾発言が重なって、ナディアはポカンと口を開ける。
それがおもしろかったのか、アニーはクツと笑ってナディアに近づいた。

アニーの整った顔が目の前にある。

化粧を落としても白い肌、その頬に濡れた灰色の髪が貼り付いて色っぽい。

濃い青色の瞳にナディアが映る様は、まるで深い海の底に閉じ込められるよう……

「俺は、男だ」

もう一度、形のいい唇がゆっくりと動き、低い声がナディアの鼓膜を震わせた。

同時に、得体の知れない何かが背筋を伝う感覚に襲われ、ナディアは無意識に足を一步後ろへ引いた。

それを逃すまいと、アニーの手がナディアの手首を掴む。

「——っ」

女性にしては高いと思っていた身長、取り繕うことをやめた低い声、ナディアの手を掴む強い力……

すべてのことが、アニーが男だと物語っている。

だけど……

「それなら……あなたは、誰……？」

目の前にいる男の正体がわからない。

なぜアニー王女としてモフロワ男爵家へやってきたのか。

まさか、ナディアと同様男女の双子で、政略結婚を拒んだ王女の身代わりと言うわけではあるまい。

そもそも、ロトカスター王国に双子の王子王女はいないはず……

混乱するナディアに、男は冷やかかな笑みを浮かべた。

「俺はロトカスター王国の第一王女……として育てられた、本来ならば第二王子と呼ばれるはずだった男だ」

「第二王子……？」

「ああ。だから、俺はノーマンとは結婚できない」

「いったい、どうしてそんな……」

頭が追いつかない。

王女だと思つて迎えた者が実は王子で、兄との結婚はできないと言う。

だが、この縁談の話を持ちかけたのは王女のほうだったのだ。

最初から結婚などできるわけがないとわかっていたのに、なぜモフロワ男爵家までやってきたのだろうか。

「それは、俺が王女だと嘘をついている理由を聞いているのか？ それとも、結婚できない縁談を進めた理由が聞きたいのか？」

ナディアの表情から彼女が何も理解していないことを察したのか、王子は呆れた様子でため息をつき、彼女から手を離れた。

「……まあ、どちらもか」

そして、ソファへ乱暴に身体を沈め、ナディアを見上げる。

「まず、俺がなぜ王女になったのかは簡単だ。田舎でのんびり育った『お姫様』にはわからないだろうが、王宮では簡単に人が殺される。特に、権力というのは醜い争いを巻き起こす。自分が人の上に立つためならば、手段を選ばない人間は珍しくない。そして、王子は王位継承権という呪縛から逃れられない。俺の母親は自分に息子を守る力がないことを理解していた」

「王子だと、命を狙われると……？」

「現に第一王子が死んだだろう」

「でも、それは事故で——」

「はっ、本気でそう思っているのか？」

王子はまさかそんな噂を真に受ける人間などいないと言わんばかりに呆れた笑いを漏らす。

「まあ、よく二十年も生きられたと言うべきか、若くして命を落として不運だったと言うべきか、俺にはわからないが」

淡々と兄の死を語る王子も、第一王子が殺されたという事実も、ナディアには衝撃的すぎて言葉が出てこない。

「とにかく、俺は母親の咄嗟の思いつきで王女となった。だが、結局その場しのぎでついた嘘は、後々自分たちの首を絞める。俺は『王女として』結婚しなければならぬからだ」

生まれたときから、対外的に王女として育ててきた以上、結婚相手は男性に限られる。

「この状況を打破するための条件は厳しかったな。王女と年が近い令息のいる家門は多い。だが、カーティス第二王子の息がかかっていない、中央政治にはできるだけ関わりがない貴族となると、

かなり絞られる。王都から離れるにつれてその条件を満たすようにはなるが、王女との接点がまったくないと、それはそれで不審に思われるからな」

その点、モフロワ男爵家はノーマンが王国騎士団に所属しているから怪しむ者はそういないだろう。

男爵という、王子の母親と同じ身分も申し分ない。『釣り合っている』と周囲から思われなければ、アニー王女は嫁げないからだ。

「そして、その令息に……未婚の姉妹がいること」

王子の視線がナディアに突き刺さる。

それは、まるで獲物を捕らえた捕食者のような……

「ナディア」

王子は名を呼ぶと、ソファから立ち上がり、ゆっくりと彼女に近づいてくる。

逃げたいと、逃げなければいけないと、本能が告げている。

重い足を引きずってどうにか後ずさりをするが、その分、王子も近づいてくるので距離は変わらない。

貴族同士の結婚は、政略結婚が多い。事業や領地経営の利害の一致、血筋を重んじている場合もあるし、理由はそれぞれだ。

しかし、王子が偽装結婚をするだけではなく、未婚の姉妹を探している理由は一つしか思いつかない。

ノーマンは長男でモフロワ男爵家の後継ぎ。

当然、結婚したら後継者を望まれる。

「お前と俺の子ならば、王女とノーマンの子として育てられる」

「そんな……この結婚を、このまま続けるおつもりなのですか……？」

ナディアの背が扉につく。

同時に、王子の腕が伸びてきて、彼女を扉と自身の身体の間に閉じ込めてしまう。

「この婚約を破棄したところで俺にはなんの得もない。お前たちのような条件のいい家門は他にないのだから。たとえあったとしても、お前はすでに俺の秘密を知った。俺が野放しにすると思うか？」

モフロワ男爵家以外に王子の秘密を知られても、いいことはないだろう。知っている人間が増えるほど、秘密は秘密ではなくなる。

ナディアがそれを知った以上、王子が彼女を自分の目の届くところに置きたいのは理解できる。

「それに、俺はこのままあの地獄のような王宮に戻るつもりはない」

王子の眼光がいつそう鋭くなり、ナディアは息を呑む。

彼の瞳の奥に静かに燃える青い炎が見えるかのようだ。

婚約破棄をして王宮に戻ったとしても、彼が王女として生きている限り、有力貴族との縁談は後を絶たないだろう。

第二王子カーティスがすすめる縁談も含め、持ち込まれる話の相手は、秘密を絶対に知られては

いけない人物だ。

「お前たちは都合のいい隠れ蓑だということだ」

「だからって……嘘をつくことがどのような悲劇を生むかは、殿下が一番よくわかっているではありませんか」

王子の瞳がわずかに揺らぐ。

強い意志の中に、ほんの少しの迷いが混ざっているように感じられた。

だが、それは一瞬のことで、王子はすぐに冷ややかな表情になってナディアを睨み付ける。

「お前に何がわかる？」

「それは……」

王子が「田舎のお姫様」と揶揄する自分が、彼の苦しみを理解できるはずがない。

彼は王子として生まれたことに何度失望しただろう。

母親の嘘を貫き通さなければならなかった理不尽さに怒っても、それが自分の命を守るためだと言われたら、その矛先を向ける場所はない。

そして、十八年もの間、たった一つの嘘を守るために苦しみ続けた末、王子がたどり着いたのが自分たち——もう一つ嘘を重ねることだということが、どうしようもなく悲しかった。

「安い同情だな」

乾いた笑いを漏らした王子の指先がナディアの頬をなぞる。

そうされて初めて、ナディアは自分が泣いていることに気づいた。

「あ……申し訳、ありません……」

泣くつもりなんてなかった。

こんな涙は慰めにもならない。

「別に、同情でも構わない。お前は罰を受けると言っただけだよ。俺がお前に……モフロワ男爵家に求めるのは、このまま俺との結婚を進めること。ノーマンが見つかるが、見つからないうが、俺にはどちらでもいいことだ。男は俺の子を産めないからな」

「——きゃっ！」

急に身体が浮いて、ナディアは咄嗟に手に触れたものを掴んだ。

王子のバスローブ……

彼がナディアを抱き上げて、部屋の奥へ進んでいく。

「殿下、待ってください！」

逃げたいのに、拘束が力強く解けない。

手足をバタつかせても、王子はバランスを崩すことなく、寝室へ入る。

「やっ」

ベッドの上に投げ出され、ナディアは慌てて上半身を起こすが、すかさず王子が覆いかぶさってきた。

その身体を両手で押し返そうと肩に手をかけると、彼はわずらわしそうにその手をシートの縫い付ける。

「あまり抵抗するな。痛めつける趣味はない」

ナディアが身を振る間に王子はバスローブの腰紐を外し、彼女の両手首をまとめて縛る。

「こんなこと——っ」

わずらわしそうにバスローブを脱ぎ捨てた王子の身体を見て、ナディアの息が止まる。

当たり前だが、男性の身体だ。

少し痩せて見える気はしても、肩幅は広く、腹筋がしなやか。

だが、ナディアの言葉が詰まったのは、そんな理由ではなかった。

「どうした？ こんなに醜い傷だらけの『王女』の身体に、まさか見惚れているわけじゃないだろう？」

目を見開いて固まっているナディアを見て、王子が皮肉を含んで笑う。

「な、ぜ……ですか？ どうして、こんなに傷だらけなのですか？」

肩や腹、腕も……傷跡がたくさんある。

ほとんどが古いもののようなだが、命にかかわるのではないかと思うような際どい場所にもあって、ナディアは唇を震わせた。

ノーマンと一緒に剣術の稽古をしていた彼女には、剣で受けた傷の治療について、多少の知識がある。

「こんなにひどい痕が残るなんて、きちんと治療を受けていないじゃないですか！」

自分が襲われそうになっている状況を忘れ、ナディアは問い詰めるように大声を出した。

王子はナディアと一瞬目を合わせたものの、やや狼狽した様子で視線を逸らす。

「何をそんなに怒っている？ 言っただろう、王宮では簡単に人を殺すと」

「それは、王位継承権の争いのせいだつて――」

「人を殺したいと思う理由などいくらでもある。権力争いで邪魔になるというわかりやすいものから、自分より身分の低い者が王の寵愛を受けたからというただの嫉妬まで、な」

「そんな……」

王子はずっと命を狙われ続けていたということ？

命を守るために王女として育てられてはいるはずなのに、その恩恵はなく、自分がなぜ王女でいるのか意味を見いだせないまま生きてきたということだ。

逃げたくても、逃げられない。

王宮という鳥籠の中で、王子はずっと一人で苦しんできたというのか。

「まあ、暗殺者は武力でねじ伏せればいいだけで対処は難しくない。馬車の細工はわかりやすいし、毒は出された食事に手をつけなければ問題ないしな」

武力でねじ伏せるとは言っても、この傷の数からして、完璧に対処できるようになったのは最近のことだろう。

馬車に細工をされると知っていれば、外出する気にならない。

王子が痩せているのは、毒の混入を警戒して食事が満足にとれないせい。

王子は十八年間ずっと文字通りの地獄で生きてきた。

彼には婚約破棄をして王宮に戻るという選択肢があると、あまりにも短絡的な考えでいた自分が恨めしい。

「不憫すぎて抵抗する気もなくなったか？」

王子はナディアの履いている厚底靴に手をかける。

「あつ、違います！ やめつ、脱がさないで……！」

彼女が足をばたつかせるのにも構わず、脛の部分で結んでいた紐を解いて通常より重い靴を片手で難なく脱がせ、床に落とした。

「待って！ 待ってください！ 話を聞いてください！」

「足癖が悪いな」

ナディアの抵抗などお構いなしに、王子は愉快そうに笑って彼女の足を押さえつつ、もう片手で右足の靴を脱がせた。

「――っ！ 殿下が王宮へ戻りたくないのはわかりました。お父様もきつと貴方を匿うことを承諾します！」

「本当にそう思うか？ 王女を名乗るくせに本当は男で、結婚生活を偽装するために娘を孕ませた」と言う、頭のおかしな俺を？ 匿う？ 正気か？」

言い方は乱暴だが、王子の言うことは事実であり、ナディアは言葉に詰まる。

父はそんなふうに娘を差し出すような人ではない。

「それ以前に、俺が本当は王子だとわかったらどうなると思う？ 一家の当主ともなれば、瞬時に

俺が『後継者候補』だと……王位継承権争いに巻き込まれる危険を察するだろう。そして、今のこの国で、カーティス以外の後援になるということは、「反逆と同義と言っても過言ではない」と

「反逆だなんて、そんな……」

「それなら、なぜ第一王子は殺されたと思う？」

王子の言うことは何もかもが正しくて、ナディアは再び口をつぐんだ。

彼が男として生きるのなら「王位を継承できる者」という地位からは逃れられない。王女として生きていたときの比ではないくらい、命の危険が増すだろう。

第一王子を排除し、今や自分が王位継承するのだと信じて疑わないカーティスとその支持者たちからしたら、彼は邪魔者でしかないのだから。

しかも、今まで性別を偽っていたというのも、国民を騙していたようで印象が悪い。

そして、田舎のといえ貴族と繋がりを持った——謀反の準備をしていると思われるもおかしくない。

逆に言えば、王子にはナディアたちしかないということだ。モフロワ男爵家から追い出されたら、彼に帰る場所はない。

「お前には悪いが……俺も手段を選んでいる余裕はない」

「——っ」

王子の手がナディアのシャツのボタンを外していく。

だが、どうしてか恐怖は感じなかった。

「私を、人質にするおつもりですか？」

「ああ。俺の子を宿しているかもしれないとなったら、もう後戻りはできない」

王子は静かに喋りながらも、ナディアとは目を合わせようとしない。

シャツの合わせを開き、胸を隠すための布に手をかけたとき……一瞬手が止まった気がしたが、ゆつくりとそれも剥ぎ取っていく。

「自分の運命を呪うんだな。双子の妹に生まれたせいで、俺に利用される」

ナディアは締め付けが緩んでいくのを感じながら目を閉じた。

王子の言葉が頭の中で繰り返される。

自分の運命を呪っているのは、彼のほうだ。

王子として生まれたせいで、理不尽な仕打ちを受けてきた。

王女として——アニーとして——生きてきた十八年間はなんの意味もなかった。

守られるはずの命も、尊厳も、何もかもなかった。

自分を受け入れてくれる人も場所も、信じられるものも、何もない。

だって、アニーは最初から存在しないのだ。

「殿下……っ」

目を開けて王子の表情をうかがうけれど、よく見えない。

泣きたいわけではないのに、涙が滲んでいる。

彼はまた、安い同情だと怒るかもしれない。

「殿下、貴方の、本当の名前は……？」

ナディアの問いが唐突だったせいか、王子が驚くのが息遣いでわかった。

それからすぐに乾いた笑いが漏れる。

「そんなことを聞いてどうする？ お前、自分が今、どういう状況にあるかわかっていないようだな？」

晒された肌に空気が触れたのとほぼ同時に、膨らみが大きな手で覆われる。

「あ……」

王子の手のひらは固く、膨らみを揉まれると少し痛い。

中性的な顔立ちと華奢な体型からは想像できなかったけれど、剣を持つ手だ。暗殺者に対抗するために鍛えたのだろう。

「アニー殿下では、っ……ない、なら……名前を——」

「そんなものはない」

「あっ！」

膨らみの先端にかぶりつかれて、ナディアの腰が揺れた。

王子の口内は熱く、ざらついた舌が頂に触れると、ビクビクと身体が反応する。

「ん……っ、や……」

舌で舐られて硬くなった頂をちゅっと吸われ、ぞくぞくと痺れるような感覚が背を伝って下りていく。

知らず、爪先に力が入った。

「無理やりされているのに、感じるのか？」

「そんなんじや……」

「そうか？」

王子が顔を上げ、蔑むように言う。

だが、彼の表情は冷たいものではない。

そこに映る感情は読み取れないものの、どこかナディアの反応をうかがっているような印象を受けた。

「でも、ここに触れるたびに、腰が揺れる」

「あっ……」

唾液で濡れた胸の頂を指先で突かれて、ナディアの腰が浮く。

硬くなった頂を指の腹で擦ったり摘ままれたりするとどこかしさが募っていく、足先に力が入った。

「気持ちいいんだろう？」

王子の探るような表情は、ナディアが痛がっていないか気にしているから？

痛めつける趣味はない、と言ったのは、彼の本心なのかもしれない。

「は……っ、ん……もう、やめてください……ッ」

ぐりぐりと両胸の蕾を執拗に攻められて、ナディアは身体を振る。

身体の奥に少しずつ熱が集まっていく。その熱が向かうのは下腹部であるのに、彼女の思考を溶かすようだ。

頭も、身体も、変になる。

「やめない」

「あぁっ、や、ン！」

王子が再び胸の蕾に吸い付く。

片方の蕾は口内で嘔られ、もう片方は指で刺激され、ナディアは背を反らせる。
なぜか恐怖はない。

無理やり触れられているのに、嫌悪感はないのだ。

王子に自分を傷つける意思がないとわかるからだろうか。

「っん……」

反対側の頂にも吸い付かれ、だんだんと呼吸が速くなる。

声を我慢しようと思うほど、身体が敏感に反応するのだ。

下腹部に集中する熱に逃げ場はなく、ナディアは無意識に足を摺り合わせようと力を入れた。

彼女の足の間に身体を挟んでいる王子がそれに気づく。

「本当に、感じているみたいだな」

「——っ」

こんなのおかしいと自分でも理解している。

普通ならば、泣き叫んで助けを求め、もっと必死に抵抗すべき場面だ。

でも……

「貴方を……拒みたいわけではありません」

彼のことを知ってしまった。

何度も命を奪われかけ、義兄が命を落とした。

王宮では他人など信頼できるわけがないだろう。

王宮を出たところで、味方が増えるわけではない。

人を従えるためには弱みを握り、脅して、力でねじ伏せなければならぬ。逃げられないように

どんな手段を使っても悪い込まなければ……

「同情で身体を差し出すというのなら、俺にとつては都合だ」

「同情だとしても……！ それの何が悪いのですか？」

元々王女の希望を叶えるつもりだった。

王女が王子であるからと言って、それは変わらない。

彼の境遇をかわいそうだと思うのは、そんなに悪いことだろうか。

今まで苦労したことを知って、少しでも助けになりたいと思うのは、いけないことなのか。

「私は、貴方の力になりたいと思った……ただ、それだけです。こんなことをしなくても、私は貴方を受け入れます。モフロワ男爵家にずっと住みたいと言うのなら、そうできるように考えます。

助けになりたいと思う気持ちに、嘘はありません。だから、もっと他の方法を一緒に考えましょ

う？」

王子はハッと乾いた息を漏らし、ナディアを睨み付ける。

「くだらない。そんな妄言、何を根拠に信じると？　もう喋るな……田舎でこのうと暮らしてた気楽な令嬢の言うことを聞いていると、イラつく」

頭に手を当てて苦しそうに吐き捨てると、彼はナディアのズボンを脱がせ始めた。

「いやっ！」

下着も剥ぎ取られ、足を掴まれる。

ナディアの叫びはもう王子には届きそうにない。

彼は自分と目を合わせようとしないから――

「お願いです、貴方だって、こんなこと後悔す――や、だめっ、待って！　あっ」

ナディアが必死に言い募るのも聞かないまま、王子は彼女の足を大きく広げさせ、その間に顔を埋めた。

ちゅつと割れ目に唇が触れ、舌が這う。

「――っ、あ、や……やめっ……」

唾液を塗り込むように舌が何度も往復しているうちに、下腹部の熱が溢れるかの如く中から蜜がとろりとこぼれた。

そのいやらしい感覚に、ナディアの身体が震える。

「あ……やだ……」

はしたなく足を開いて、自分でも見たことのない秘めるべき場所を暴かれている。

王子がこぼれた蜜を吸る音もナディアの羞恥心を煽り、身体がますます熱くなった。

もつと奥の蜜まで舐めとろうと舌が蜜壺に出し入れされ、ナディアは仰け反って喘ぐ。

「ああ……だめ、やあ……」

ダメだと思うのに、王子の舌の動きと息遣いを追ってしまう。

胸に触れられていたときよりもずっと強い刺激――

下腹部の疼きがどんどん大きくなった。

「ん……動くな……」

ナディアの腰がくねると、王子はぐつと腕に力を入れて押さえつける。

くちゅくちゅと愛液と唾液が混ざる音がいやらしい。

ざらついた舌が割れ目をなぞり、秘芽を突く。

「やっ……ああッ！」

目の前がチカチカとするほどの刺激が背筋を伝って、ナディアは悲鳴にも似た声を上げた。それが合図のように、王子の愛撫が激しさを増す。

「んう……あっ、だめ……も、やめ……ああっ、あ……」

じゅつと強く秘芽に吸い付かれ、呼吸が止まりそうになった。

一方的に与えられる熱は苦しくて涙が滲むのに、身体はその先を求めているかのように疼く。何か得体の知れないものが迫ってくる感覚に、ナディアは拳を強く握った。

「っ……は、あ……だめ……いや……」

何に追い立てられているのかもわからない。だが、このままでは自分が自分でなくなるような気がして怖い。

「まだ、足りないか？」

王子の手が膨らみに伸び、ツンと勃起上がった頂を指で摘まんだ。
秘芽と一緒に弄られて、ナディアの腰がビクツと跳ねる。

「んあっ、やっ……ああっ」

ぐりぐりと強く蕾を捏ねられ、腰が揺れると彼の顔に秘所を押しつけるような格好になって……
「ん、気持ちよさそうだな……」

「や……ちがつ……んっ」

痛いほどの刺激は快楽なのか――

ナディアにはわからない。

無理やり組み敷かれているのに快感を覚えているなど……そんなはしたない自分を否定したいのに、身体は悦び、どんどん熱を帯びていく。

その先がどんなものかなど知らないはずなのに「欲しい」と思うのだ。

「だめっ、や……もう、変に……っ、ああ――ッ」

もう無理だと思った瞬間、心臓が一際大きく脈打った気がした。

ドクン、ドクンという激しい心臓の音とともに、下腹部に集中していた熱がじわりと全身に広

がる。

「あ……ん、はっ……」

秘所から蜜が溢れるのを感じ、ナディアは身体を震わせた。

呼吸が乱れ、汗が滲む。

「達したか？」

王子が覆いかぶさってくるのをぼんやりする視界でとらえる。

彼の手が内腿を伝って濡れそぼった秘所に触れた。

「もう少し慣らすぞ」

「あっ！」

ぬふりと指が蜜壺に差し込まれ、ナディアは身体を強ばらせた。

「力を抜け」

「や、できな……っ」

じわじわと奥へ進む指先の感触。王子の指に絡みつく襞は、彼を拒もうとしているのか、受け入れようとしているのか……

違和感が大きくて、ナディアは涙をこぼして首を横に振った。

「いやあ……あ、や……抜い、て……あっ……」

「ダメだ」

王子が胸の膨らみに吸い付く。